慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.119- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

鈴木　正崇

新書らしくない。多くの人が『山岳信仰』に寄せた感想である。まさしくその通りで新書の体裁をとりつつ専門書に近い内容を含みこみ、一般の人にも関心を呼ぶように工夫したのが本書である。書評を書いた由谷氏は詳細に本書の骨子をたどり、本書の意義を明確にしてくれた。感謝申し上げたい。本書の目的は、修験道に大きな比重が置かれていた山岳信仰の研究を地域の起源伝承や儀礼に寄り添う形で再編成し、日本全体を大きな視野で把握することにあった。「日本文化の根底」に山岳信仰があり、人間と自然とのいのちの循環や交流という思考が基底にあることを主張した。単なる修験道の紹介ではなく、地元の側から山岳信仰を見つめ直すことを目指した。まさしく第三の道である。

修験道研究の第一人者の宮家準氏（慶應義塾大学名誉教授）は『修験道章疏』を基本文献として「成立宗教としての修験道」の儀礼・思想・組織、地域的展開を明らかにした。しかし、日本の山々には修験道の影響が濃い所と薄い所、ほとんど影響を受けない所もある。山岳信仰を修験道の視点からではなく、地域の歴史や創造力から見直す必要がある。日本は長期にわたって神仏混淆の世界を通して様々の思想・儀礼・美術・芸能を生みだしてきた。国宝や重要文化財には山岳信仰の遺宝も数多い。しかし、慶應 4 年（1868 年。明治元年）に神仏判然令の太政官布告が出て、廃仏毀釈が広く展開し、さらに明治 5 年の修験道廃止令で、神仏混淆を中核においた修験道は壊滅状態となり、山岳信仰も大転換を余儀なくされた。ただし、山岳信仰の伝統は根強く残り、民衆の間では徐々に復活して隆盛を迎え、戦後も維持された。講による登拝、信仰登山は最近まで続いてきたが、高度経済成長とモータリゼーションで急速に衰えた。

山岳信仰を知ることは「日本の近代を問い直す」ことであり、「もう一つの近代」を提示することにつながる。日本の近代が否定しようとしたものやその過程を明らかにすることで、日本の近代を逆照射できる。これこそが本書の隠れた主題である。21 世紀に入って、グローバル化が進行する中で、大峯山や富士山がユネスコの世界文化遺産に登録され、重要無形民俗文化財の修験の芸能もユネスコの無形文化遺産に登録されるようになった。国史跡に指定された霊山も多い。「文化の資源化」「文化の客体化」が、山岳信仰や修験道を大きく変えようとしている。

著者が山岳信仰に関心を持ったのは 50 年ほど前から始めた山登りがきっかけである。当初は登山それ自体が目的であったが、山の中腹や山頂に小祠があり、山頂にもカミサマが祀られていることに気付くようになった。登拝口には神社や寺院があり、鳥居が建ち、各所に注連縄が張られている。山名には仏菩薩の名前が多い。薬師岳、観音岳、普賢岳、阿弥陀岳、大日岳などである。そして、権現山、御嶽山、聖岳、天狗岳などは本地垂迹や修験道に基づく日本独自の思想による命名であることが次第にわかってきた。山岳信仰が仏教と巧みに融合して、神仏

鈴木正崇「著者リプライ」
『三田社会学』第 21 号（2016 年 7 月）119-120 頁

混淆の思想と実践を展開してきた。山の神々は本地を仏菩薩として、権（かり）の姿で垂迹するとされ、権現の称号で呼ばれるようになった。そして、山岳信仰を基盤として、修験道という山岳を修行の場として験力を得る信仰形態が発達し、日本各地の山に広がった。こうした知識は修験道研究の大家で現在も活発に研究を続けている宮家準先生に負う所が多い。今回、書評を執筆した由谷裕哉氏もその薫陶を受けた者の一人である。私よりも由谷氏の方が白山・立山・妙高山などで詳しく調査し報告を書き、論文や著書を刊行していたと思う。宮家先生は社会学専攻に所属して慶應の宗教社会学・宗教民俗学・文化人類学を根付かせるべく精力的に活動され、私自身はその学統を継ぐことになった。そして、私も定年を区切りとして、ライフワークの一つの山岳信仰について概説を書こうと思い立った。個別の山々については長年にわたり深い研究を続けてきた研究者がいる。出羽三山の戸川安章氏、大峯山の宮家準氏、英彦山の長野覚氏などはその代表者である。著者の意図は、並みいる諸先輩の業績に学びながらも、日本の山岳信仰を総体として把握するとどのような世界が見えてくるかを示すことにあった。新書というコンパクトな体裁に可能な限り最近の業績を取込み、多くの方々に山岳信仰について関心を持ってもらいたいというのが著者の願いであった。折りしも、2016 年から 8 月 12 日は「山の日」として正式に「国民の祝日」になる。これを機会に多くの人が「山の精神史」にも関心を寄せ、山を通して人生の生き方を考え直す契機になればと思っている。読後評には「山は信仰の場だったとは知らなかった」という反応が多く、逆に著者がショックを受けた。つい最近まで信仰登山は普通のことであったのに山岳信仰は急速に忘れさられてしまったのである。

ここ数年の間に、有名な山々や聖地が開山・開創以来の大きな折り目の年を迎える。開山とは前人未踏であった山に登拝し祭祀や祈禱を執り行うことである。2016 年は日光開山 1250 年、2017 年は白山開山 1300 年、2018 年は伯耆大山（ほうきだいせん）開山 1300 年である。遡ると 2015 年は空海による高野山開創 1200 年、2014 年は四国八十八ケ所霊場開創 1200 年であった。大峯山で修行したとされる役行者の 1300 年遠忌は 2000 年に行われ、羽黒山開山 1400 年祭は 1993 年であった。公伝の仏教伝来は 538 年や 552 年であるから、100 年かけて受容された仏教が山岳信仰と混淆し、現在に至るまで約 1300 年の歴史が流れたことになる。この長い時間の持つ意味は大きい。そして、日本の歴史書・地誌の編纂もほぼ同時期に始まった。『古事記』編纂 1300 年は 2012 年で、『日本書紀』編纂 1300 年は 2020 年にやってくる。最古の地誌『風土記』編纂 1300 年祭も行われた（713 年に編纂の詔。播磨国 2015 年、常陸国は 2013 年。出雲、肥前、豊後は行わず）。山岳信仰の本格的展開は歴史の記録化の開始と重なっている。平城京への遷都は 710 年で 2010 年に 1300 年祭を行った。王権や権力との関係も考え直さないといけない。山岳信仰が奈良時代初めに仏教の日本的受容によって本格的に展開し 1300 年の歳月がたった。しかし、現在の山岳信仰は、明治時代以降の巨大な近代化の力によって、大きな変化を遂げた姿なのである。

日本の山岳信仰についての概説書は本書が初めてかもしれない。「山と日本人」という主題は大きく複雑である。本書をきっかけに新たな問題提起が起こることを期待したい。

（すずき　まさたか　慶應義塾大学名誉教授）